

## 伊計島の住居の周辺

——ヒンパン・石敢当・シャコガイ・屋根獅子・門の一対獅子——

上江洲均

イツクマの浜を囲む形で伊計のムラは形成されている。後方へいくにつれ徐々に小高くなっている。そのいちばん上方に伊計小中校がある。そのすぐ横に「ノロ殿内」があり、すこし下に根屋がある。この小高いところからイツクマの浜と港の方へとムラは発展していったが、それ以上の余地がなくなると、今度は東後方へ新しい屋敷がひろがり始めている。

とはいえ、空き家や荒れた空屋敷が目立つ。本島の都市部へ出たままもどらないのだという。一軒一軒くまなくたずね歩いてみると、空屋敷が菜園としてよく利用されている例が多い。ただしかし、なかにはすっかり後も絶えた廃屋に位牌だけがまつらされている例を見る。屋敷の片隅に小さな祠だけという例もある。

最近、道路を拡張したことによって、石垣が壊されてブロック塀になった所が目立つ。あらためて石が多い島であることに気付き驚嘆する。例を挙げるまでもないが、近世以後の墓はもちろんのこと、屋敷の石垣、家屋の石柱、豚舎、目隠し垣（ヒンパン）、軒下の踏み石などがある。石灰岩の豊富な島だからとだけではなく、その

裏には人々のイエの永続性を願う姿があり、それを垣間見る思いがする。屋敷を掘ったら石が出たので、それを利用したこともある。しかし、東海岸から採石して多人数で引いたり、担いだりして運び入れた話を聞いた。大正期以後は、玉城村港川からアワ石を運び込む傾向があり、これら幾種類かの石が屋敷を取り囲んでいる。清潔であり、実にすばらしいことである。

ところで、イツクマの浜に向かって立てられた石がある。「イツクマのウスメー・ハーメー」である。これは、海の彼方からやってくる魔物に対するいわゆる魔除けであるという。近くに自然石による獅子岩がある。イツクマの浜のさらに向こうをながめていかにも雄々しい。ところが身体を見ると、セメントによる修理のあとがある。戦後のこと、息子を戦死させた人が、やけを起こしてハンマーで割ったという。ところが、それからというものたたりがあり、本人はもちろんのこと嫁や孫まで短期間のあいだに死に絶えてしまった。この話は、恐ろしい事例として今も語り継がれている。

島に暮らす人々のこころを見るおもいである。自然をおそれ、石や木や土地にやど

（★うえず ひとし 沖縄県立博物館学芸課長）

った神をおそれる。これこそ人間の本質なのかもしれない。ムラの繁栄はもちろんのこと農作物の豊作にいたるまで、かつては神女たちによって祈願されつづけてきた。しかし、その神女組織も崩れようとしている。

それだからというわけでもないだろうが、この島の屋敷やその中の家屋を守護するものが多いように思われる。

まず「屋敷神」がある。屋敷の東側に小さな祠をつくっている例もわずかながら見られる。しかしその他の多くの家では、祠など設げず八月の屋敷のお願などには、屋敷の四隅を拝んでまわるのだという。

「フーフダ（呪符）」がある。門脇や屋敷の四隅に立てている事例を見ているが、これについて話を聞くことができなかつたので、ふれることはできない。見たかぎりでは事例は少ないようである。

その他、年中行事の中で八月の「柴差し」十二月の「鬼餅」の臨時のこととしてススキを立てたり、餅を包んだゲットウの葉を吊るしたこともあったかもしれない。またかつては豚の流行病の時など豚舎の前にスイジガイを下げたともいう。

これらを除いて、今回ここにあげたのが「ヒンプン」「石敢当」「シャコガイ」「屋根獅子」「門の一対獅子」である。

「ヒンプン」とは、門に入ったところにある中垣のことである。邪気払いよりも目隠しとする考え方方が強いようであるが、石のすばらしい構造物として調べた結果、21個確認することができた。

「石敢当」はT字路の突き当たりの屋敷に立てる石のことであるが、17個を確認したほとんどが最近市販している新しいものであった。それらしい無文字の石も二、三見たが確認できなかつたので、数字の中には加えられない。

「シャコガイ」は、ヒレジャコを一個体、口を開いた格好で石垣などの上に置いたもので、石敢当以前の古い屋敷の守りだったのではないだろうか。津堅島にもよく見る事例である。これを伊計島では「ムンヌキムン」といっている。道の突き当たりに置いた事例は4例確認したが、他に門柱の上や門の脇において4例、同じく門にスイジガイを置いた事例は3例あった。

「屋根獅子」は、屋根に置いた魔除けの獅子のことと、一般にシーサーという。屋根獅子を置いた家を45軒確認した。そのうち5体が焼き物で、あとはすべて漆喰左官によって作られたシックイ製である。そのうち戦前からのものというのがわずか数軒で、ほとんどが戦後のものであった。また、屋根獅子を置いた家の屋根の種類では、赤瓦が10軒、セメント瓦が33軒、鉄筋コンクリートの家が2軒である。この2軒のうち、1軒は玄関部分だけ赤瓦を置き、その上にシーサーをおいているが、分類上ここに入れた。屋根獅子をのせる家は母屋であるから、一軒で2個という事例は見られず、したがって、45軒の事例があり、他の村落に比較しても多い傾向にあるといえよう。

「門の一対獅子」は、近年の流行であるが、目的は装飾であることと、もうひとつ

は屋根獅子同様に魔除けである。35例（軒）確認した。設置場所は門柱の上である。沖縄製が多いが、2、3の例では台湾製もある。

## 1. ヒンブン

(1) 石造ヒンブン ヒンブンを確認できた屋敷は、合計71軒あった。ヒンブンは、門の突き当たりにある垣のことであるが、何でできているかについては幾つかに分類できる。

まずなんと言っても古風で特徴的なのは、石造のヒンブンであろう。これは21例あった。石質はすべて石灰岩である。そのほとんどが島内から産出する石である。問題は形態である。古いタイプは、一枚石を地面にたてたものであり、歴史を感じられる。伝承では地中に3尺以上埋めているということであるが、確認の取りようがない。

他に3つの石を並べて立て、両端を柱状に立てたヒンブンは、後世の完成品であろうけれど、とにかくこの島の特徴ある建造物と見ることができよう。

ヒンブンを“魔除け”とする考え方は、あまり聞き取ることができない。むしろ常識的に“目隠し垣”とする例が多い。しかし、屋敷の石垣圜いやいろいろな構造物の中で、特別に大事に扱われて来たのはどうしたことだろう。周辺の垣根に対し、一段と映えて見える。しかも屋敷の周囲は生垣なのに、ヒンブンだけは見事な石造りという例もある。

この形は、セメントおよびブロック造りにも影響し、素材を変えて現在も踏襲している。前述のように両端に柱を立てたようなタイプは、一枚岩のヒンブンとは異なり、技術的に一段の飛躍である。この原形は、あるいは竹アジロの両端に木の柱を立てたヒンブンを意味するかもしれない。話によれば、かつては“チヌブ”と呼んで竹アジロを立てた例が多かったという。石造ヒンブンは、これを原形としているのかもしれない。

ヒンブン（石）一覧表

※ 単位 cm

所有者名	種類	寸法
島田政成	石灰岩、1枚石	高144、幅203
上原	" 3枚石	高137、幅270 柱高182、
東江キク	" 1枚石	高113、幅194
島根登	" "	高130、幅216
ノロドンチ	" 3枚石	高116、幅281 柱高147
平善真	" "	高138、幅243、厚28 柱高168
(不明)	" 1枚石	高109、幅160
田場久栄	" 3枚石	高120、幅238 柱高138
中石清春	" "	高115、幅296 柱高156
比嘉ウタシ	" 1枚石	高115、幅220
当山タケ	" 3枚石	高99、幅293
川端屋(永吉)	" 1枚石	高129、幅211
江田知明	" "	高150、幅270
ナカデン屋	" 3枚石	高122、幅231 柱高154
畑(古屋敷)	" 1枚石	高116、幅187、厚26
運天カメ	" "	高96、幅168、厚24
金武清栄	" "	高118、幅270、厚13
伊礼康明	" "	高129、幅123、厚27
平	" 3枚石	高120、幅279、厚20 柱高166
金城	" 1枚石	高131、幅96
(空屋敷)	" 3枚石	幅225

(2) 生垣 生垣では、ゲッキツのほか琉球コクタン、仏桑華、クロトン、カイヅカイブキなどがある。

その中でもゲッキツを珍重している。調査例34例中ゲッキツは26例もあった。立てる本数にこだわる傾向にあり、3本が最も良いとするのは9例確認できた。ゲッキツ垣を主としながらも、内側に南洋スギやホウオウボクなどの樹木を植えている例が数例あった。

(3) セメント及びブロック セメントやブロックでつくった例は6例あるが、その多くは石造ヒンパンをかたどっている。すなわち両端に柱を立てたようなタイプである。これは伊計島の最も理想とする形だったからにちがいない。

(4) 板・トタン・その他 板では衝立風な可動式のものを置いた例がある。この他少ない例ではあるが、鉄板・ビニール板・トタン・仮設のブロック積みなどの事例がある。

近年、ヒンパンを撤去し、その後も設置しない家も相当ある。自動車を屋敷内に入れるためその傾向があるといわれる。

## 2. 石敢当

「石敢当」とはっきり確認できたのは17個である。そのうち2個の石敢当を所有する屋敷が2軒あるので、合計15軒である。

T字型道路のつき当たりのブロック塀につけたのがふつうである。石質は、最近市販の移入石である。3事例は、ブロックとセ

メントコンクリートに自分で刻んだものである。新しいものでは、那覇などへ出た時購入したという例が多い。

古い事例でそれらしい無文字の石であるが、確認することはできなかった。

## 3. シャコガイ

シャコガイを魔よけとして、石垣の上や門に置いている例は8軒ある。種類はヒレジャコで、1個体の口を外向きに開いた形で立てている。

また門にスイジガイを置いている例も3例あり、同様の意味があると説明している。これを総称して「ムンヌキムン」という。

「魔除け」の意味である。方言ではシャコガイを「アジケー」といい、スイジガイを「ウシベーベー」という。前者は沖縄の一般的な呼称で交叉することによる名称である。また後者は、角からの連想で、牛や山羊を思わせる呼び名となっている。

石敢当と同じ所に置いている事例が2例確認できた。

## 4. 屋根獅子

調査の結果45の事例を確認した。通常1軒で1個を母屋の正面屋根に載せているので、45軒の家でシーサーを所有しているわけで、他の島または村落に比較して決して少ない数ではない。正面（南）を向いている例が多い。蹲居して正面向きのもの、横向きのものなどがある。

前述のように焼物5体、シックイ製40体である。焼物の内訳けは、釉薬のかかった上焼獅子が2体、素焼が3体である。古いもので10年になる。

シックイ製では、戦前のものだと確認できたのが2例あるが、シーサーをのせた赤瓦屋根が10軒あるので、数はふえるかもしれない。セメント瓦では、ほとんどが戦後のものである。新築をして屋根を葺いたとき、あるいはシックイを塗り替えたとき置いた例にしばられる。

シックイ製は左官が作るが、その左官は、本島から来た人、伊計島の人の例に混って宮城島から来た例が6例確認できたが、そのほとんどは、宮城島の字桃原から来た人であった。魔よけ、あるいは火伏せと考えられているが、龍すなわち龍巻よけと答え

る事例もあった。

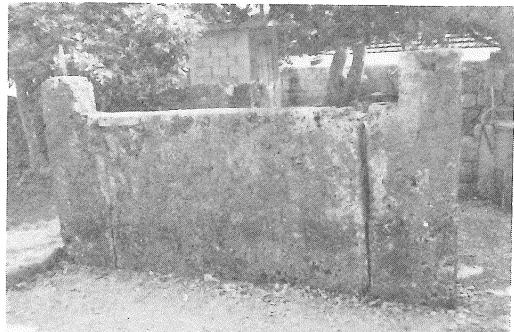
### 5. 門の一対獅子

門柱に1対おいた獅子で、近年の流行であるが、全部で34例あった。ほかに1例ヒンプン垣の上に置いた所があり、合わせて35軒で確認できた。某家では、門に3対置いた例があったが、これも1例として扱うこととした。

この門柱の1対獅子は、単なる飾りものばかりでなく、魔除けを意味している。購入した直接の動機は、行商人が島へやって来て家々をめぐって売り歩いたからであるが、「屋根獅子」がこの島に多いように、島には本来これらのものを受容する何らかの素地があったからだと考える。



島根家の一枚石のヒンプン



ノロドンチの三枚石からなるヒンプン



ゲッキツのヒンプン



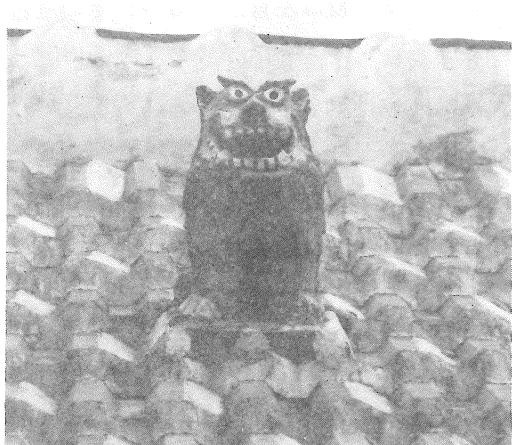
ブロックに彫った石敢当



シャコガイの「ムンヌキムン」



シーサー（屋根獅子）



シーサー（屋根獅子）



門柱の獅子



門柱の獅子（側にあるのはシャコガイ）